

西ブータンの崖寺と民家 八地区を中心に

Cliff Monasteries and Farmhouses in West Bhutan In the Areas around Haa District

浅川 滋男* ・大石 忠正*²

ASAKAWA Shigeo OISHI Tadamasu

要旨：2012年以来、年1回のペースでブータンの崖寺と瞑想洞穴に関する調査を続けてきた。このうち、第1～3次調査（2012-2014）の成果は一昨年度、第4次調査（2015）の成果は昨年度の紀要で報告した。今回は第5次調査（2016）の成果をとりあげる。調査範囲は西ブータンの八地区とティンブー市である。ツァルイ寺、カツォ寺、ジユムテン寺、ラカン・ナグボなどの僧院のほか、八地区の民家仏間を調査した。現在、ブータンの仏教僧院の大半は楼閣式の本堂を備えるが、こうした高層の本堂は国家形成期以後、境内に導入された可能性が高い。初代シャブドゥン（政教両面の指導者）のガワン・ナムゲル（1594-1651）が国家統一を成し遂げる17世紀以前、チベット仏教の諸派が林立し、多くの山城ゾンが築かれていた。13世紀初期以降次第にドゥク派が西ブータンで勢力をひろげ、チベットから亡命してきたガワン・ナムゲルと合流して一躍勢力を全土に拡大した。この結果、ブータンという国家が誕生する。国家形成の後、山城の多くは廃城を余儀なくされ、一部は僧院に機能転換していった。その結果、城の中心施設である楼閣ウチは僧院境内の本堂等宗教施設に転用された。こうして近世僧院の形式に城の建築と空間構成が少なからず影響を与えたものと想像される。ただし、ソンツェンガンポ開山と伝えるジャンパラカン（ブンタン）やキチュラカン（パロ）は、現在なお平屋の本堂を維持している。こうした僧院の成立年代の証明はやっかいであるが、これまでの調査データから推定を試みる。

【キーワード】 ブータン、チベット仏教、崖寺、城、国家形成期

Abstract : Since 2012, Authors have investigated cliff monasteries and meditation caves in Bhutan once a year. Authors have already reported the outcome from the first to the third investigation (2012-14) in TUES bulletin of fiscal year ; - District were surveyed. Most Bhutanese Buddhist monasteries have two or three-storied main halls now. Such multi-storied buildings are more likely to have been constructed after the national formation period. Before the seventeenth century when *Ngawang Namgyal* as the first *Shabs drun*, who was the leader of both politics and religion, achieved a national unification, various denominations of Tibetan Buddhism competed with each other and many *Dzong* were constructed on the mountains. *Druk* denomination gradually enlarged the power in the west districts, and by joining *Ngawang Namgyal* who took refuge from Tibet, finally expanded territory in the whole land. Consequently, the nation called Bhutan was born. After the national formation, most mountain castles were forced to abandon its original function and a part of them changed the function into the monasteries. Therefore, multi-storied *Utsu*, which were the center of the castles, were converted into such religious spaces as main hall in the monasteries precinct. Thus the monasteries style in early-modern times was influenced by the architectures and spatial

*¹公立鳥取環境大学環境学部

*²公立鳥取環境大学環境学部 卒業生

organization of mountain castles. However, such oldest monasteries as Jambay Lhakhang at Bhumtang and Kichu Lhakhang at Paro, which were handed down orally that they were founded by Srongbtsansgampo have even now one-story main hall. It is very difficult to prove the construction age of the monasteries. Authors tried to estimate it from the data collected until now.

【Keywords】 Bhutan, Tibetan Buddhism, Cliff monasteries, Castles, the period of national formation.

1. はじめに

1-1 研究に至る経緯と着想

鳥取県が世界遺産暫定リスト入りをめざして国に申請した「三徳山とその文化的景観」(2006-2007)は文化庁の審査により厳しい評価を受け、断念を余儀なくされた。三仏寺投入堂(国宝)を中核に据えた申請提案に対して、対象の「顕著な普遍的価値」を証明する必要があるとの批評を受けたことから、筆者は山陰地方に卓越する「岩窟・岩陰と複合する懸造仏堂」の起源を解明すべく、2010～2012年度科学研究費基盤研究(C)「石窟寺院への憧憬 岩窟/絶壁型仏堂の類型と源流に関する比較研究」を申請し採択された。岩窟・岩陰と複合する懸造仏堂を「日本の石窟寺院」と位置づけ、国内の類例、及び中国華北・西域・西インドなどで石窟寺院と懸造仏堂を視察し、おもに木造建築と洞穴・岩窟の複合性に焦点を絞りながら、大乘仏教の伝播域における石窟寺院・岩窟仏堂の多様性を「窟(いわや)の建築化」という視点から解釈しなおした[参考文献10]

と同時に、この問題を古典的な大乘仏教圏だけで捉えるのは不十分との認識が芽生え、上座部仏教圏とチベット仏教圏の洞穴/洞窟僧院の予備的調査にも着手した。2013～2015年度には科学研究費基盤研究(C)「チベット系仏教及び上座部仏教の洞穴僧院に関する比較研究」が採択され、ブータンとミャンマーで計4回の調査を実施した。とりわけブータンの調査には力を入れており、2012年から毎年1回のペースでブータンを訪れ、崖寺と瞑想洞穴に係わる調査研究を続けている。2017年度までに6次の調査を終え、調査時間は8週間以上に達している。このうち第1～3次調査の成果を集成した第1報「ブータンの崖寺と瞑想洞穴」は2015年度の本学紀要[参考文献21]、続く第4次調査成果にあたる第2報「ブータンの崖寺と瞑想洞穴(2)」は2016年度の本学紀要[参考文献22]で報告している。本稿は第3報として第5次調査の成果を取り扱う。

ちなみに、ブータンの歴史的建造物に関する先行業績はブータン政府が1993年に刊行した概説書[参考文献14]を嚆矢とする。その後、日本の建築家・研究者による調査・研究が展開するが、いずれも有形文化財としての僧院本堂あるいは民家を主題としている[参考文献1・

2・4・7～9]。密教の根幹に係る瞑想修行の場としての瞑想洞穴に着目し、仏教の内在的動態から僧院の変遷を紐解こうとする先行研究は皆無である。筆者らの一連の研究は、ブータンの崖寺ドラク・ゴンパにおける瞑想と瞑想洞穴の実態、および本堂の創建年代に係る諸問題に切り込もうとするものであり、独創性の高い研究だと自負している。

1-2 第5次調査の概要

第5次調査は2016年8月27日～9月5日の10日間おこなった。これまで未踏の地であった西ブータンの八地区がおもな調査地である。八地区はインドと中国の国境に囲まれた高地(標高2,900m前後)である。今回は仏教僧院7寺のほか、ジャンカネ地区に独立して設置された瞑想洞穴の跡を訪ねた。ここは本堂を伴わない瞑想洞穴である。また、仏間に焦点をあてた一般民家(農家)の調査もおこなった。

すでに述べたように、今年度まで6次の調査を続けているが、第1～2次は人的交流と広範囲の踏査を目的とする予備的調査のレベルであり、第3次から本格的な調査に移行した。第3次調査(2014)は、ブータン農業省のディレクター、タシ・ドルジ(Tashi Dorji)氏の招聘によるもので、おもに東ブータンのメラク(Merak)地方で元遊牧民の定住民家や放牧地を視察した。第4次調査(2015)では、中央ブータンのタン溪谷に所在するウゲンチョリン(Ogyencholing)博物館を受け入れ機関として、近隣の仏教僧院の調査をおこなった。第5次調査以降(2016-17)は、調査地区の拠点を西ブータンの八地区に移した。宿泊したソナム・ジンカ(Soednam Zingka)・ファームハウスを運営するジンカ家は八地区の有力者であり、ガイド兼インフォーマントのウタム・ガーレイ(Utam Ghaley)氏(ブータン・エンカウンター社代表)がジンカ家を通して、近隣の僧院や民家と交渉し調査の承諾を得た。

1-3 調査の許諾に関する問題

すでに述べたように、筆者らが継続しているブータンの調査は主に崖寺ドラク・ゴンパと瞑想洞穴ドラフを対象とするものである。ところが、ブータンでは原則とし

て僧院の仏堂・瞑想洞穴の内部撮影や本格的な調査を禁止している。したがって、実測・測量は境内屋根伏配置図や立面図など外まわりが中心になるのだが、本堂内部の調査が完全に拒絶されるかと言えばそうでもない。僧院によっては、仏像の撮影をしないという条件で内部の撮影や実測の許可がおりる場合もある。実際には、親交の度合い、寄進の多寡などによって対応はまちまちであり、これまでも内部の実測調査や本尊仏像以外の部分的な内部撮影を許可された経験は何度もある。残念なことかもしれないが、こうした調査許可には一定額以上の寄進が効果的だと言わざるをえないのが現実であろう。

しかし、寄進をしてもなお調査に対して厳格な立場を貫く僧院も少なくない。そうした僧院においては、本堂内部は歩測による略平面図の作成を短時間で片付け、仏像・仏画の基礎情報についてはインフォーマントや僧侶の説明を録音することで対応してきた。こうした調査方法では限界があるため、第5次調査では、民家の仏間を補足的に調査した。居住者の承諾が得られれば、民家仏間の撮影は自由であり、詳細な実測が可能である。仏間の空間構成のみならず、祭祀されているすべての神仏について配置や名称など仔細な聞き取りができた。この結果をうけて、今年度（2017）の第6次調査は民家仏間をおもな調査対象とすることになった。結果としてみるならば、本稿で報告する第5次調査（2016）は、主たる調査対象が崖寺（僧院）の仏堂から民家の仏間に移行する転換点となった点、特筆すべきであろう。

一方、瞑想洞穴ドラフについては、部外者の入室を厳禁している。僧が瞑想中の場合、近寄ることもできない。ただしブータンでは、ネパール大地震（2015）で被災した仏教建築の修復・再建が始まっており、内部の見学が許可される場合があり、実際、再建中の瞑想洞穴に入室した経験もある。またブータン各地には、廃墟となった瞑想洞穴跡が山間部に散在する。洞穴のみ残すものもあれば、掛屋の石積壁・版築壁を残す遺構もあるので、その実測とヒアリングから当初の状況を復元できる。瞑想洞穴でおこなう修行の内容については、僧侶からヒアリングするしかない。そのヒアリングは、瞑想体験を中心として修行の人生を長時間にわたって聞き書きすることになるので、できれば境内ではなく、ホテルなどの宿舎に招聘しておこないたい。境内では一日の仕事におわれ、時間的な余裕がないので、正式に宿舎に招待し、2～3時間かけてじっくり話を聞きたいのだが、今回は第4次調査（2015）ほどの時間的な余裕が調査側にもなかったため、スケジュールがかみ合わず、境内での短時間のヒアリングにとどまった。年代を判定するための建築部材等の年輪サンプル（米粒大）についても、

所有者の許可を得たうえで、屋根裏などにおいて資料を採取した。また、田野や山間部に散在する廃絶した瞑想洞穴や機能不明の建物跡の調査にあたっては、ガイド兼インフォーマントが周辺の村人と話し合っただけで情報を得ながら「問題ない」と判断した場合、実測等をおこなった。

2. 崖寺と民家仏間の調査

2-1 ツァルイ寺

14世紀建立の僧院

パロからティンブーへと続く自動車道はティンブー川を挟んで両側を崖で囲まれている。その山崖は禿山というわけではないが、ところどころ岩肌が露出し、短い草木が緑の絨毯のように地皮の薄い岩肌を覆っていた。首都ティンブー市街地に近づくにつれて東側の丘頂上に初代シャブドゥン（政教両面の指導者）ガワン・ナムゲルが開山し、国内で一番古い城とされるシムトカ・ゾンが姿をあらわす。一方、西側の急峻な崖のふもとにたたずむのがツァルイ寺（Tshalui Goempa）である。標高は約2,200m。本堂ラカンは2階建の切妻造鉄板葺で、周辺に小ぶりの建物群を付属する。最近、研修・資源プロジェクト（Training and Resource Center Project）が始まり、新たな施設を建設していた。今後は尼寺に変わるという。

寺の縁起は14世紀に遡る。現在の宗派はドゥク派だが、開山当初はニンマ派（古派）を信仰していた可能性もあるとガイドのウタム・ガーレイ氏（Utam Ghaley）は指摘する。ニンマ派からドゥク派に転向した僧院は非常に多い。住職によれば、寺の記録に従う限り、本堂ラカンは今から762年前に建立したものである。寺はツァルイ村の村人たちの尽力で存続してきたが、維持費の高騰で、2003年より政府に寺の管理を委託している。

本堂裏にそびえる山崖中腹に瞑想洞穴ドラフを併設する。標高は本堂より約100m高い位置に建つ。目視では近く感じるが、急な道のりを上がるのは容易ではなかった。黄色い旗がたなびいており、僧侶が瞑想中であることを表示しているため、至近距離まで近づけなかった。少し低い位置から見上げただけなので、ドラフの正確な規模は分からないが、屋根に落棟がついており、4室に間仕切りされているようにみえた。聞き取りによると、台所の設備も整っているという。

土間式の本堂

本堂ラカンは外陣と内陣で構成されている。外陣は6本の大きな柱で構成され、南側には壁画を描く。北側には本堂に隣接する小舎へ続く入口を設ける。外陣を抜け、内陣へ移ると正面に仏壇飾りのトルマやシャブドゥンの



図-1 第5次調査地の位置



図-2 ツァルイ寺全景



図-3 建設中の施設（ツァルイ寺）

小像などが供物台の上に並ぶ。外陣の床は板材を使用、内陣は板床と三和土（たたき）の土間を併用している。これまで数年にわたりブータンの僧院を調査してきたが、内陣を土間とする例を知らない。ツァルイ寺内陣のケースは稀なものである。土間の上にはベンチを置く。

数多くの仏像が土間を囲むように祀られている。本尊は弥勒菩薩（*Maitreya*、ゾンカ語：Jowo Jampa）で、内陣に奥の仏壇中央に位置する。正面右に釈迦如来、正面左に無量寿仏（*Amitāyus*、ゾンカ語：Tsepame）がそれぞれ祀られ、仏像の中で比較的大きなものであった。小さな像だが、ブータン仏教の開祖グルリンポチェや十一面観音も正面に並ぶ。また、正面の両隅には執金剛神（*Vajrapāni*、ゾンカ語：Dorje Chang）と多羅菩薩（*Tārā*、ゾンカ語：Dolma）を配置する。執金剛神は仏教徒を守る護法善神を指す。インドではヴァジュラパーニと呼ばれ、造形的には半裸形で表現されている。ターラー（多羅）菩薩は観音菩薩の目から発せられる聖なる光から生まれた16歳の少女とされる。中国側では多羅仏母、救度仏母などとも書かれる。手に青い蓮の花をもつのが特徴である。ターラーは「風」を象徴する [参考文献11～13]

続いて、菩薩（*Bodhisattva*）が左右4対ずつ並んでいる。菩薩は仏教において一般的に成仏を求める（如来になろうとする）修行者を指す。加えて、釈迦の弟子と思われる11体の小仏が両壁の菩薩の上に並ぶ（両壁で22体）。内陣入口脇に四天王（*Caturmahārāja*）も安置する。帝釈天の配下で仏教世界を守護する武神である。東方を護る持国天、南方を護る増長天、西方を護る広目天、北方を護る多聞天からなる。多聞天のみ単独で祀られることがあり、単独では毘沙門天とも呼ばれる。

2-2 カツォ寺

ボン教の聖地

これまで数年ブータン調査を継続しているが、西ブータンの西端を占めるハ（Haa）地区は初めての訪問になる。ハ地区を訪れて最初に調査したのがカツォ寺（Katho Goempa）である。ハの市街地から少し離れた丘の上に境内を構える。標高2,880m。同じ西ブータンのパロやティンプーに比べて、集落・僧院ともハ地区のほうが数百メートル高い位置にある。高所のため、歩くだけで息苦しい。駐車場で下車して最初に目に入るのが石垣だ。金網でひ



図-4 ツァルイ寺背後山の瞑想場



図-5 ツァルイ寺本堂遠景



図-6 ツァルイ寺本堂入口正面

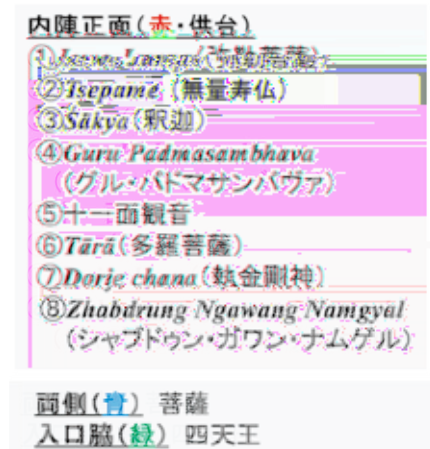


図-7 ツアルイ寺 本堂内陣 略平面図

とくりにされた石垣が3段に積み上げて段状に形成されており、斜面の整地であるとはいえ、とても立派に見える。石垣の横道を通り、平場に行くとカツォ寺の境内が目の前にあらわれる。ゴナゴ(ゾンカ名: gonago)と呼ばれる平屋の門をくぐり抜けると中庭に入る。前方に本堂ラカン、その両側を長屋ジムカンが囲む。宗派はドゥク派だが、開山期は8世紀あるいはそれ以前に遡ると伝承されている。グルリンポチェがブータンを訪ねる以前、ここはボン教の聖地であった。あくまで伝承ではあるが、グルが寺地に来訪してニンマ派の仏教僧院に変わったのだという(こういう縁起を有する寺院は非常に多い)。

本堂は14世紀頃に建立したという。現在の建物は66年前に再建された新しいものだとして住職のツェリン・テンジン(Tshering Tenzin)氏(32)が教えてくれた。本堂は2階建てで、1階を講堂、2階を仏堂にあてる。1階はとても古く構造上危険なため、早急な修理が必要とのことであった。ネパール大地震(M7.8、2015)の影響と思われる。両側のジムカンのうち1棟は大地震によってガラスが割れ、壁の塗装が剥がれていた。

本堂内陣

本堂1階から木梯を上がると内陣へ続く控えの間(外陣)がある。内陣の空間はさほど大きくはなく、これまで調査してきた僧院と近似するサイズと感じたが、一般的な内陣は2本柱構成であるのに対して、ここは4本柱構成になっている。第4次調査(2015)で調査した6ヶ所の僧院を振り返っても、クルジェラカン(ブンタン)

のみ内陣4本柱であり、他は2本柱だったので、4本柱構成は2例目にあたる。4本のうち2本の柱が仏壇側に位置し、その柱間に供物台が挟まれる。台上には水の入った金鉢や仏壇飾トルマ、釈迦像、シャブドゥン・ガワン・ナムゲルの小像、さらに象をかたどった器を置く。内陣の南にあたる窓の前にはシャブドゥンの玉座を配する。

内陣での撮影は、仏像が写らなければ良いという住職のご厚意により許された。本尊はグルリンポチェ、両隣に十一面観音を併祀する。この3体は仏壇中央に位置する。内陣両端は3段構成の棚をそれぞれ設け、正面左に10体、右には9体の小仏像を3段の棚の中に納める。シャブドゥンや執金剛神、ヤブユム(ゾンカ語: Yab-yum)やガルダ(Garuda)らしき像を確認できた。ヤブユムとはチベット仏教に特有な歡喜仏のことであり。男性尊格が配偶者と性的に結合した状を表現する。日本では「男女両尊」「父母仏」「男女合体尊」とも呼ばれる。ガルダは古代インドの神話に登場する神鳥。炎のように光り輝き、熱を発する「火の鳥」である。

内陣の両側は壁ではなく、経典を収納する棚を設える。扉にはマンダラを描く。経典の収納棚が内陣に多いという印象を受けた。正面右端にも経典を納める棚があった。こちらには守護神2体を祀る。八地区の谷筋とカツォ村をそれぞれ守護する神であり、ボン教の荒ぶる神霊が調伏されたものである。後述するように、これらの「神」の実態は民家仏間での調査でさらに明らかになった。カツォ寺の内陣でとくに印象的だったのは大きなタンカ(Thangka)が3枚掛けられていたことである。タンカ



図-8 カツオ寺外観



図-9 カツオ寺の山門(ゴナゴ)

とはチベット仏教において人物やマンダラなどを題材にする掛軸式の仏画を指す。シャブドゥンと十一面観音、そして第53代ジェケンポ(ドゥク派座主)のイシ・ゲドゥップ(Yeshey Ngödrup: 在位1915-1917)をそれぞれ中心に描いたものである。

建設中のドラフ

カツオ寺背後の山の崖には瞑想場がある。ふもとの農村の小路を通り、川沿いの畦道を進むと崖下に着く。崖の頂にはカツオ寺の本堂、少し下がった崖の岩陰に小ぶりの建物が見える。その小さな建物が瞑想洞穴ドラフである。標高は2,800mあたりと目視で感じた。ドラフは白と黒の壁色で機能が異なる。調査時は改修中で壁に色が塗られていない状態であった。八地区の中心部を貫く八川の支流が崖下に流れている。崖の対岸からドラフを遠望し撮影した。ドラフの周辺には台所風の施設もみえ、少し離れた場所に

はチベット式チオルテン(多宝塔)も存在する。崖には切り裂いたような跡が広い範囲で確認され、蛇行しているが、それが僧院と瞑想場をつなぐ道筋と思われる。

2-3 ラカン・ナグボ

黒壁の本堂

八地区とパロ地区をつなぐチュゾム 八自動車道を南に進む。八地区はインドと中国西藏地区に挟まれた国境地帯で、軍事的に重要なエリアであるため、インド軍が駐留している。インド軍専用空港兼トレーニング施設の広大な敷地对岸にあるのを目安に、幹線道路から細道に入る。細道は小高い丘の上まで続いており、その上にはタクチュ・ゴンパという崖寺があるが、そこまで上がらずに途中の僧院を調査した。その僧院がラカン・ナグボ(Lhakhang Nagpo)である。Nagpoは「黒(不善=悪)」を意味するので、ラカン・ナグボは「黒い寺」と訳せる。標高2,400m。

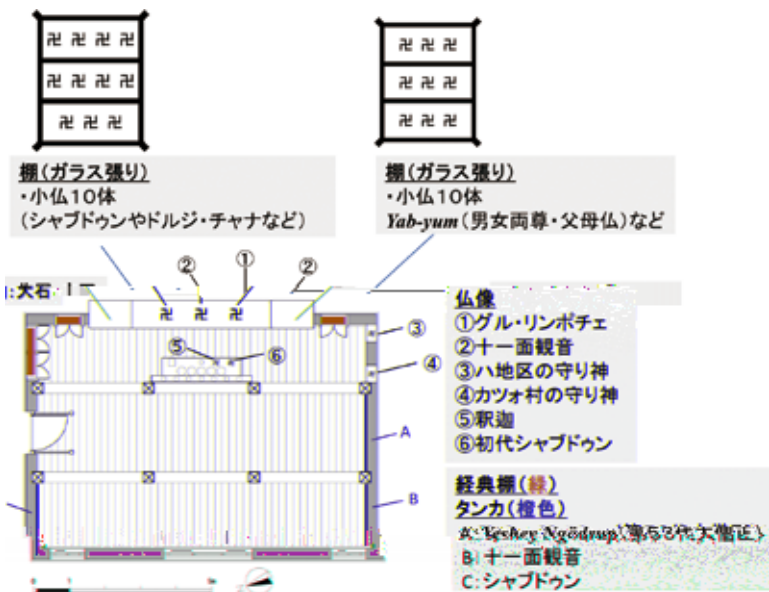


図-10 カツオ寺 本堂内陣 略平面図



図-11 崖下からみたカツオ寺の全景

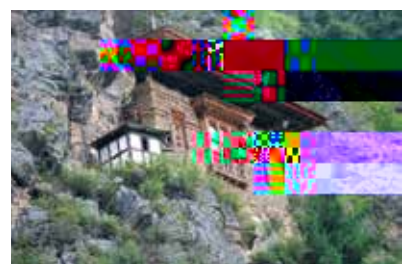


図-12 建設中のドラフ(左は燭屋)

本堂は宝形造・鉄板葺・平屋建のこじんまりしたもののだが、文字通り、壁が黒く塗装されている。壁色について住職に訊ねてみたところ、詳しく分からないと言われたが、瞑想洞穴ドラフの場合、白い壁は「悟りに至る修行」、黒色の壁は「悪霊の調伏（浄化）」のための施設であることを表示しており、ラカン・ナグポの場合も、本堂自体が後者の役割を担っていた可能性が高いであろう。加えて、建物が低い平屋建である点も気にかかる。日本でもそうであるように、棟高の低い建物ほど建築年代が古い傾向にあるからだ。

ラカン・ナグポの手前には谷川が流れており、その下流側で八川の本流と合流する。古来、こうした水系の結節点でしばしば洪水が発生している。そして、洪水はボン教の「悪霊」や「魔女」の悪行とみなされてきた。その「悪霊」を仏教の修法によって調伏し、谷筋の守護神として再生する試みがブータン各地でおこなわれてきている。ラカン・ナグポもそうした役割を担っていたであろうと思われる[参考サイト1]。ラカン・ナグポの近くにラカン・カルポ(Lhakhang Karpo = 白い寺)もある。瞑想洞穴と同様、ラカン・ナグポ(黒い寺)が悪霊の調伏、ラカン・カルポ(白い寺=善寺)が悟りに至る修行場という役割分担を想定できる。しかも、白・黒両寺の起源をソンツェンガンポの創建とも伝えているが、それはあくまで伝承である。寺の縁起は17世紀、すなわちドゥク派政権による国家形成期の開山としており、それ以前は荒廃していたという。ただ、気になるのは、すでに述べたように、棟高の低い平屋建である点で、ソンツェンガンポ創建と伝承されるキチュラカン(パロ)やジャンバラカン(ブタン)の本堂と共通している。

ラカン・ナグポ境内に瞑想洞穴ドラフはなく、本堂以外では長屋と燭屋が建っている。本堂をはじめ、各建物は石垣上の平場に位置しており、周辺地形を俯瞰できるような場所に立地する。本堂の背後には「ツォメン(Tshomen)

の池」と呼ばれる井戸館がある。ツォメンとはブータン民話に登場する「上半身は人間、下半身は蛇の姿をした妖怪」である[参考サイト2]。蛇は地下を象徴し、水を司る神霊とされる。ツォメンの神話は現在のウォンディボタン県(中央ブータン)が発祥と言われている。

ニンマ派・ドゥク派の壁画

本堂内陣内部では壁画の美しさに目を奪われる。シャブドゥン・ガワン・ナムゲルとその後継者たち、釈迦と弟子たちを壁いっぱい描く壁画が一面に展開している。チベット仏教の王君として知られるチェギ・ゲップ(Chaeygi gep)とドゥク派の高僧を描く画や十一面観音を描いた画を確認した。ニンマ派の神仏と崇められるドルジ・センバを描く壁画もある。その一方で、ラカン・ナグポの内陣にはタンカを吊していない。本堂南側に窓があり、手前にシャブドゥンの玉座を配する。内陣は2本柱構成とする。

入口から少し進んだところの右側に段差があり、仏壇へ続く。本尊の弥勒菩薩を中心に、両隣にシャブドゥンとグルリンポチェを祀る。以上の3体が仏間の奥まった場所に鎮座するが、それらを守護するように2体の像が脇を固める。一つはタンディン。ティンブー谷の守護神としてよく知られている。第4次調査の成果をまとめた前報[参考文献22]で報告したように、グルリンポチェの妻、イセ・ソゲルの瞑想場と伝承されるティンブーのタンディネ寺は、古くは馬の頭と悪魔の体をもつ悪霊タンドリンが棲み着いていたが、イセの瞑想によって調伏され、顔はペマジユネ(グルリンポチェハ変化の一つ)体はドゥク派の高僧デッセイ・テンジンの姿に変わり、ティンブー谷の守護神タンディンとして再生され、その場所にある僧院をタンディネ寺と呼ぶようになった。こうしたティンブー谷の守護神が八地区でも祀られていることが明らかになった。いま一つの守護神は、ツアルイ寺でも取り上げた執金剛神である。



図-13 ラカン・ナグポ本堂外観



図-14 長屋ジムカンなど(ラカン・ナグポ)



図-18 ジュムテン寺外観



図-19 本堂（ジュムテン寺）

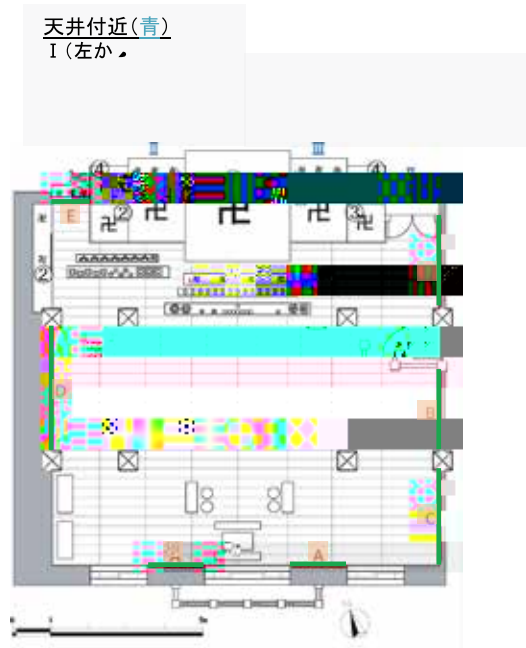


図-20 ジュムテン寺 本堂内陣 略平面図

先ほど述べたラカン・ナグポと異なり、ジュムテン寺には多くのタンカが掛けられていた。釈迦、シャブドゥン、ドゥク派ジェケンポを描いたものなどである。南側の窓手前にはシャブドゥンの玉座を配する。本堂内陣はカツォ寺と同じ4本柱構成とする。

2-5 八地区民家の調査

婿入りの習慣

ソナム・ジンカ・ファームハウスの近隣に屋敷を構えるZ家住宅で主屋の調査をおこなった。ファームハウスのメンバーも調査に同行してくださった。民家（農家）の調査は第2次調査（2013）のD家以来2軒目となる。すでに述べたように、民家仏間の調査は僧院本堂調査の補足的な意味がある。訪問時、女主人のSMさん、夫の

TNさん、夫の母親KWさんの3名が在室されていた。Z家は女主人SMさん（46）の実家だという。夫のTNさん（52）はZ家に婿入りし、現在に至る。婿入りと同時に、母親KWさんも一緒に引っ越してきた。ブータンでは婿入りが多い。もちろん、嫁入りのケースもあるが、婿入りの方が主流だとインフォーマントは強調した。以前は、女主人SMさんの父が一家の主人であり、その前はSMさんの母、さらに先代は、SMさんの祖父が家主であったという。SMさんとTNさんの間には子どもが3人いる（26歳の息子、23歳と17歳の娘）。息子は日本語のツアーガイドとして働いている。長女は南ブータンにあるサムチー（Samtse）の大学で教師を目指して就学中。次女は高校生で、この家に住んでいる。



図-21 Z家外観



図-22 ヒアリング対応者のみなさん

民家の建築様式と仏間

ブータン民家の主屋は平屋建が少なく、2階建や3階建の楼閣式が主流を占める。後述するように、これは城ゾンの楼閣ウチが影響したものと推定される。3階建の場合、1階を家畜舎、2階を倉庫(収蔵室)、3階を居住スペース、4階にあたる屋根裏は作業場兼乾燥場とする。2階建では2階の倉庫を屋外に設けて省略する。Z家の主屋は3階建である。主屋の周辺を土塀や雑舎群が取り囲む。門をくぐると家畜が自由に歩き回っていた。2階の収蔵室は4室あり、うち2室は床板を敷いている。残り2室はタタキ土間仕様の食料庫であった。ジャガイモがたくさん収納されていた。3階の居住スペースは簡略的に述べるならば「田」の字形の4室構成で、前列2室のうち前側の部屋が居間ユカ、その奥に台所兼食堂タブツァンを置く。奥の列は、居間に続く広間が仏間チョスムの前室、その奥に仏間を配する。

内法約5m四方の仏間には、奥の仏壇に諸仏を安置し、壁にはタンカを吊す。仏具一式を納める棚は脇の壁沿いに配する。正面仏壇の棚には計10体の仏像が祀られていた。なかでも、阿弥陀如来、観音菩薩、グルリンポチェは他の小仏より大きな像とする。仏像を祀る棚の手前の供物台上にはタントン・ゲルポ(Thangtong Gyelpo: 1385-1464 or 1361-1485)の小仏が一体だけ置かれていた。タントン・ゲルポはチャクザン派の系譜の祖とされる高僧で、14世紀にチベットからブータンにやって来た。土木や建築、医学にも精通し、「万能人」のような存在であった[参考サイト4]第2次調査(2013)で訪れたタグツォガン寺(パ口地区)の吊橋を建設した伝承がある[参考サイト5]

タントン・ゲルポの隣には2枚の写真がある。正面向かって右側の白黒写真はカルマパ(Karmapa) 16世だという。カルマパはカギユ派の最大宗派であるカルマ・カギユ派の教主の名前であり、黒帽子をかぶることから「黒帽子派」とも呼ばれる。ブータンとネパールの間に位置

するインドのシッキム州で信仰する人が多い。八地区はシッキム州と接しており、その影響で黒帽子派の信者がいるのかもしれない。左側のカラー写真は、ドゥク派(赤帽子派)の高僧テンジン・ラブゲ(Tenzin Rabgay 第4代摂政 1638-1696)の生まれ変わりと言われる人物である。現在は修行中であるが、次期ジェケンポ(ドゥク派座主)の候補と目されている。

仏壇に向かって左側には、恐い形相の像が2体ある。赤い顔のジョー、青い顔のチュンドゥである。この2体は八地区の守護神として知られ、一対にして祀ることが多いという。もとは谷の悪霊であったが、高僧によって調伏され、仏教側の護法尊となった。タンカは、グルリンポチェをはじめ釈迦や十一面観音、シャブドゥン・ガワン・ナムゲルを描くものである。

3. 僧侶のライフヒストリーと瞑想体験

3-1 ツァルイ寺住職の生涯

僧侶の瞑想体験を若干紹介しておきたい。ツァルイ寺にはあわせて3人の僧が常住しており、そのうちラム・チェンチョ(Lam Chencho)氏がヒアリングに応じてくれた。年齢は60歳である。チェンチョ氏はティンブー西部、パ口との県境に位置するツァルナン村(Tshalunang)ゲミナ(Gemina)で生まれた。ツァルイ寺から少し離れた場所にある。9歳のとき、ツァルイ村のチミタンカ寺(Chimithangkha Lhakhang)に出家した。チミタンカ寺では、村人が亡くなった際に葬儀などの法要を取り仕切っていた。38歳のとき、4ヶ月間の短い期間であるが瞑想修行をおこなった。場所はドチュラ(Dochula)峠に近いタシガン寺(Trashigang Goempa)のシカサと呼ばれる洞穴である。シカサ洞穴はとても有名で、4ヶ月の短期であった理由は、多くの僧が順番待ちの状態であり、入れ替わりを早めるためだったという。

修行中は、深夜1時に起床し、21時まで瞑想する。12時



図-23 Z家 3F 平面図



図-24 D家 3F 平面図



図-25 仏壇（Z家仏間）



図-26 Z家仏間のジョー神（左）とチュンドウ神（右）

から1時間の昼食と21時前に少しお茶を飲む以外はもっぱら瞑想に没頭する。これはネンド (*nyendo*) とよばれる瞑想修行である。ネンドは非常に厳しい瞑想スタイルであり、上に述べた生活からもその過酷さがうかがえる。4カ月の瞑想を終え、タシチョ・ゾン内にある僧院に召還された。その後、地位が高くなり、チミタンカ寺の住職に昇格した。7年前、現在ツァルイ寺に配置換えになった。

3-2 カツォ寺の若い僧

八の市街地を俯瞰できるカツォ寺の僧ツェリン・テンジン (*Tshering Tenzin*) 氏にインタビューした。テンジン氏は32歳と若い。僧院にいる14人の僧の中で最年長であり、教師として教鞭をとっている。カツォ寺は小中学校レベルの仏教教育機関である。出家した子どもたちは9歳までトルマ作りや仏教の基礎を学ぶ。テンジン氏は八地区の出身だが、17歳のときティンブー市のタシチョ・ゾン内にある僧院に出家した。出家の年齢は比較

的遅いほうである。瞑想の経験はない。今後、瞑想修行をするかどうかも未定だという。タシチョ・ゾンからの指令を待っている。カツォ寺には4か月前に赴任したばかり。入れ替わりで同い年の住職が他の寺へ異動した。タシチョ・ゾンがすべての僧侶の人事を管轄している。

3-3 ラカン・ナグボ住職の半生

黒壁の僧院ラカン・ナグボの住職を務めるピンチュ・ラム (*Pinchu Lam*) 氏から聞き取りをした。51歳のピンチュ氏は僧院のあるクブリ (*Kubri*) 村で生まれ、11歳のとき、ティンブー市にあるディツェンポドラン・ゴンパ (*Dechenphodrang Goempa*) に出家した。ディツェンポドランは「至福の宮殿 (*Palace of Great Bliss*)」を意味し、ティンブー市北部に位置する。仏教の基礎や祈禱の訓練をした。その後、タシチョ・ゾンへ移った。タシチョ・ゾンでは大学クラスの修行をした。瞑想は、ティンブー市のドラン・ゴンパ (*Drolung Goempa*) で体験



図-27 ピンチュ氏（ツァルイ寺）



図-28 先生と若年僧（カツォ寺）

したが、その僧院には洞穴がない。瞑想のための建築施設ツァムカンで瞑想したのである。3年3ヶ月の瞑想期間を終えたとき31歳になっていた。瞑想後も3年間、ドラク・ゴンパに籍を置いた。その後、八地区のタクチュ・ゴンパ(Takchu Goempa)で2年間、プナカのヌブガン・ゴンパ(Nubgang Goempa)で2年間教鞭をとった。タクチュ・ゴンパは八市街地南部の丘の上に位置し、ふもとにラカン・ナグボが境内を構える。12年前にラカン・ナグボに異動し、現在に至る。ラカン・ナグボに常住する僧侶は2名のみ。もう一人は若い僧である。

3-4 ジュムテン寺の修行僧

標高3,000mを超える高地に境内を構えるジュムテン寺には多くの僧侶がいる。カツォ寺と同様、学校の機能を果たしている。10代半ば～後半にあたる若年の修行僧が多い。ジュムテン寺を訪れた際、講義棟ロブカンで授業がおこなわれていた。講義中であったため、寺の住職ファブ・ツェリン(Phub Tshering)氏にインタビューできなかった。代役として、修行僧ニマ・テンジン(Nima Tenzing)氏に情報提供者となってもらった。かれは15歳で、ジュムテン寺から40kmほど離れたジャンカネ(Jankhana)村の出身である。2年前に出家したばかりで、トルマ作りや祈祷、楽器演奏の訓練、仏教の基礎を学んでいるという。もちろん、まだ瞑想を経験していない。若いため、寺の縁起など、詳細な説明をしていただくには至らなかった。

以上みたように、瞑想は僧院独自の修行ではなく、ドゥク派総本山のタシチョ・ゾンが人事配置の一環として管轄するものであり、僧院に附属するドラフでとりおこなうと決まったわけではない。他の僧院の洞穴ないしツァムカン(瞑想修行の小屋)に移動しておこなう場合もあることが判明した。ちなみに、タシチョ・ゾンのゾンは「城」と訳されるが、今では軍事的防御性をさほど意識したものではなく、むしろ宗教的支配者の住宅を兼ねた行政府であり、僧院を伴うのが一般的である。

4. 僧院再建の現場と職人

4-1 ワンディツェ寺の石工

第4代国王による再建事業

すでに何度か述べたように、先のネパール大地震(2015)の影響で、ブータンの僧院も被害を受けており、2016年以降、各地で修復・再建事業が始まっている。タシチョ・ゾン西側に大きな崖が切り立ち、その崖上に境内を構えるワンディツェ寺(Wangditse Lhakhang)は標高2,500mの高地にあり、ティンブー市街地から北に3kmの場所にあたる。ここもまたネパール大地震によ

る被害が大きく、再建工事のまっ最中であった。

ワンディツェ寺はブータン建国の父、初代シャブドゥン・ガワン・ナムゲルによって1629年に開山したと伝える。本尊は釈迦如来。建立当初、ここはシャブドゥンの城だったので、ワンディツェ・ゾンと呼ばれた[参考サイト6]。廃城後、ラカン(僧院)に転じて今に至る。その一方で、第8代摂政デシのドゥク・ラブゲ(Druk Rabgay:在位1707-1719)によって建立したという縁起もある[参考文献3:p.157]。こうした開山伝承に因み、先代(第4代)国王ジグミ・シンゲ・ワンチュク(Jigme Singye Wangchuck:在位1972-2006)が修復の指揮をとっている。前国王の管轄下にあるワンディツェ寺ではあるけれども、常住する僧侶はいない。崖下のタシチョ・ゾンに籍を置く僧侶がワンディツェ寺の法要も仕切るといふ。

ワンディツェ寺境内には経典旗ダルシンや五色旗マニダールがたなびき、大きなマニ車も設置してある。その近辺からはタシチョ・ゾンを俯瞰できる。

石工の仕事

ワンディツェ寺は先代国王が修復の指揮をとる特別の僧院であり、修復中の本堂の撮影は許可されなかったが、石工頭のカルマ(Karma)氏の案内で内部を見学し、説明を受けた。外陣に2本と内陣に4本の柱を配し、本尊を祀る奥の小部屋(内々陣)を伴う。壁・天井まわりは工事のためベニヤ板で覆われていた。ベニヤ板の裏側にはチョルテン(ストゥーパ)を8基安置しているという。

本堂の外にある石材の加工現場と古材保管庫の撮影は許可された。本堂前の加工現場では複数の石壁試験体を製作していた。壁のテーパー(透減)を少しずつ変えた試験体である。西ブータンでは壁を版築にするのが一般的で、中央～東ブータンで石積壁を多用するが、ワンディツェ寺では石積壁を使おうというわけだ。

本堂内部の木部はほぼすべて新材に差し替えられている。古材はどこにあるのかと訊ねると、本堂裏手の小屋に保管してあるとのこと、さっそく足を運んだ。たしかに、山のように古材が積み上げられている。材種を訊ねると、バシンとダウンシンだという。いずれもゾンカ語の呼称であり、両者に共有される「シン」は木を意味する。ダウンシンはケヤキのように年輪が鮮明であり、イトスギでも松でもない材種とインフォーマントは言う。参考文献1[pp.276-279]によると、バシンはツガ(マツ科)の類で、軸組や小屋組に使用されるという。比較的高強度が要求される箇所用いるのがバシンである。一方、ダウンシンはモミあるいはヒマラヤスギの類で屋根葺材に多用される。



図-29 古材保管庫(ワンディツェ寺)



図-30 石工頭と壁の試験体(ワンディツェ寺)

4-2 チュンドゥ・ラカンの大工

八地区の守護神を祀るラカン

八地区の宿舎ソナム・ジンカ・ファームハウスの背面側にチュンドゥ・ラカン(Chundu Lhakhang)が境内を構える。2家仏間に配されたチュンドゥという八地区の守護神の名をそのまま冠しており、ラカンの起源は比較的浅いという。すでに2家仏間の項で説明したように、チュンドゥは本来ボン教の「悪霊」であり、それを瞑想によって調伏し、仏教側の護法尊として再生したものだが、そうした異教出身の神霊を中心におくラカンは必ずしも例外的ではない。ティンブーのタンディネ寺なども同系の僧院である。再建中の本堂は平屋建で、正方形平面に宝形造の屋根を被せる。再建工事が始まったばかりであり、本尊などの神仏の像は長屋ジムカンに移して仮の本堂にしていた。手前の部屋にチュンドゥ神、奥の部屋にシャブドゥンやグル、十一面観音を祀る。

棟梁へのヒアリング

チュンドゥ寺はネパール大地震(2015)によって被害を受け、2016年2月から政府支援と地元住民の寄進により、再建に近い形で修復工事が進められている。現場は大工な

ど多くの職人でごった返していた。今回、ヒアリングに対応してくださったのは、棟梁格のシーガ(Sigay)氏である。当時60歳。西ブータンの東にあるプナカ県ゴンマゲオ村の出身で、大工仕事は25歳から始めた。もともと村大工であったが、プナカゾンの修復が始まるとその現場に移った。プナカ城の修復は15年もの長期に及んだという。プナカの修復終了後、棟梁クラスに格上げされ、チュカゾン(Chukha Dzong)、チランゾン(Tsirang Dzong)など南ブータン各地の城の修復に携わった。2016年2月からチュンドゥ寺の担当に異動した。ちなみに棟梁にあたる大工の最高職を「ゾベン」と呼ぶ[参考文献1: pp. 275-276]

修復・再建の傾向

木造・石造・煉瓦造を問わず、一般に古建築修復にあたっては、古材をできるだけ再利用して材料のオーセンティシティ(真実性)を維持する。言いかえるならば、文化財価値を高めるようにするものだが、ブータンではほとんどの古材を新材に取り替えるのが半ば常識になっている。これについてシーガ氏はもちろん否定的な立場をとっていない。とくに重要なのは耐久性の問題だと指摘する。ブータンの主要な歴史的建造物はおもに17世紀



図-31 チュンドゥ・ラカン外観



図-32 長屋(チュンドゥ・ラカン)

の国家形成期以降に数を増していくが、現存する本堂等の主要建造物は300～400年の歴史を有するものが少ない。こうした長年の疲弊・劣化に加え、ネパール大地震による損壊が部材の脆弱性に拍車をかけている。ブータンの歴史的建造物は更新時期を迎えている、という認識が国家にも技師・職人にも共有されている。また、チュンドゥ寺の場合、地元住民からの寄進ということで古材・新材のどちらを使うかについて話し合いをおこなったという。その上で、僧侶と住民は古材再利用の「修復」よりも、新材を多用する「再建」を選択したのだそうだ。

私見ながら、ブータンの場合、日本のように現代の建築産業技術と伝統的技術が乖離していない。比較の対象として適切でないかもしれないが、江戸時代の日本のように、再建して材料は新しくなるけれども、伝統的技術は維持されており、その時代特有の建築を再現できる。その点において、再建の問題は日本ほど深刻ではない、と評価できるかもしれない。

5. 僧院本堂成立時期についての予備的考察

5-1 年代測定からみた本堂の成立時期

ブータンでは、崖寺を含むあらゆる僧院の境内に本尊としての神仏の像を安置する本堂ラカンが存在する。しかし、密教伝来から諸派林立の中世期までは、本堂と称すべき礼拝施設が存在したとは限らない。古代～中世期においては、瞑想洞穴における修行こそが僧院の役割であり、偶像崇拜の施設としての本堂は必ずしも重要視されていなかった可能性がある。言いかえるならば、僧院の本堂は初代シャブドゥン、ガワン・ナムゲル（1594-1651）による国家形成以降増加したとも考えられるであろう。一方、ソンツェンガンポ創建伝承の僧院は当初から本堂を備えていた可能性は当然想定すべきだが、ソンツェンガンポ創建伝承そのものが史実としては疑わしいという見方もあるかもしれない。



図-33 シャバ村 建物跡（廃墟）

こうした僧院本堂の起源に係わる問題は発掘調査をおこなわない限り、歴史の真実を見通せないが、筆者らは一部の僧院・民家の所有者の許可を得ながら、科学的年代測定サンプルを採取し、建築年代に関する視野を少しずつ獲得しつつある〔参考文献19～22〕とくに本稿と係わるデータをいまいちど整理すると、第5次調査で二度訪問し、寄進を繰り返して住職の許可を得たツアルイ寺の場合、パレオラボ社の測定に従う限り、柱材資料の最外年輪年代は1494-1602 cal AD（信頼限界74.2%）、1616-1645 cal AD（同21.2%）を示している。心材型か辺材型か不明なので下限年代を知ることはできないが、古ければ15世紀、新しくとも17世紀後半～18世紀前期ころに納まるものと推定される。寺伝にいう14世紀造営とは矛盾するものの、国家形成期以前に遡る可能性を否定できない状況にある。

第5次調査では、新たな試みとして建物版築壁に含まれる有機物の年代測定に取り組んだ。ブータン建築では、修理・修復時に木造部材が頻繁に差し替えられるのに対して、建物を囲む版築壁は当初の構造をよく維持しており、それが廃墟となって各地に残っている。サンプル採取の対象は第2次調査（2013）で訪れたダカルポ・ゲムジャロ寺のほぼ真下に位置するパロ地区シャバ村の建物版築壁（廃墟）である。遺構はパロとティンブーをつなぐ自動車道バベサ＝ティンブー・エクスプレスウェイが左右に曲がりくねる平地の水田の中にある。路肩を利用して市場が形成され、農民たちが豊富な作物を持ち寄っているの、何度も買い物をしてきた馴染み深い場所であり、市場側から南に立地する遺構を毎回のように撮影してきた。その、見慣れた廃墟を版築壁サンプル採取の処女地として選んだことになる。ブータンを去る日に残された時間が少なく、大急ぎの調査になった。まず壁の表面を薄く削り、内側の古い土を露出させてから土を掻き込んでビニール袋に納める。その土を精査し、有機物・炭化木材の細破片をピンセットで摘出した。帰国後、パレオラボ社に年代測定を依頼し

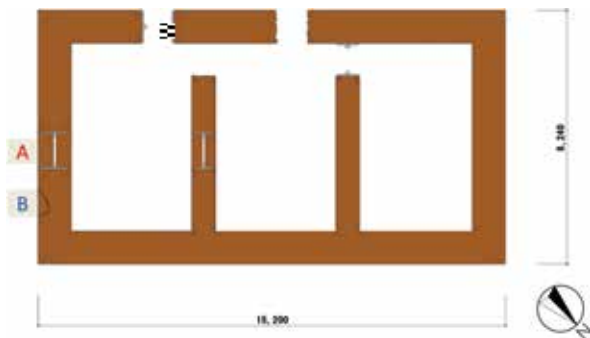


図-34 サンプル採取位置（同前遺構）

た結果、採取した炭化木材の破片は樹皮直下の年輪を残す辺材型であることが分かった。以下に測定結果を示す。

シャバ村建物跡木片 サンプル A

1420-1460 cal AD (信頼限界 95.4%)

シャバ村建物跡木片 サンプル B

1490-1603 cal AD (信頼限界 75.3%)

1612-1644 cal AD (信頼限界 20.1%)

サンプル A は15世紀前半～中頃、サンプル B は15世紀末～17世紀中頃を示している。同一建物跡の別部位から得られた年代であり、両者は共存していたわけだから、建築年代は後者(サンプル B)を採用せざるをえない。しかも、その測定年代はツァルイ寺本堂の柱材最外年輪年代とほぼ一致している。ガワン・ナムゲルがチベットでの権力闘争に敗れ、ドゥク派勢力の拡張する西ブータンに逃れたのは1616年のことであり[参考文献3]、それ以後の年代に下る可能性も信頼限界20.1%でありうるが、サンプル A で示された古い年代を考慮するならば、信頼限界75.3%の15世紀末～17世紀初頭、すなわち国家形成期以前に遡る可能性がでてきたと言える。中世群雄割拠の時代、すでに各地の山上に城ゾンは存在していたわけだが、被支配階級の人びとは黒テントで移動する遊牧生活もしくは素朴な家屋を伴う放牧生活を送っていたはずである。シャバ村の建物跡は楼閣式の民家主屋ではないと断言できるわけではないけれども、平地に建つ僧院本堂の廃墟である可能性も指摘せざるをえないであろう。

5-2 城から僧院への転換

いまブータン各地にみられる多くの僧院では、本堂が2階建以上の楼閣ウチを備える。伽藍は楼閣を壁で囲いこんでおり、その囲壁からやや離れた岩山の絶壁洞穴に瞑想洞穴ドラフを設ける。ティンブー市のツァルイ寺や八地区のカツォ寺などはそうした配置の典型を有する。ただし、瞑想洞穴を伴わない僧院も多くあり、その場合はドゥク派総本山のタシチョ・ゾンの命をうけて他の僧院の施設で瞑想修行をおこなう。また、ソンツェンガンボ開山(7世紀)の伝承を有する一部の著名な僧院、すなわちブータンのジャンバラカンやパロのキチュラカンは密教伝来(8世紀)以前の開山伝承があり、僧院を山間部の崖ではなく、河川流域の平地に配し、本堂を平屋建としている。今回の調査例では八地区のラカン・ナグボが平野部に境内を構え、平屋建の本堂を有するばかりか、壁を黒く塗る例外的な僧院である点、特筆すべきであろう。

さて、楼閣ウチを伴う僧院の伽藍形式は城ゾンの空間構成とよく似ている。この場合の城とは行政機能を伴う権力者の居住施設であり、防御機能を有するだけでなく、

内部に僧院を伴うのが一般的である[参考文献15・16]、少なくとも、現状の空間構成をみる限り、城と僧院にはなんらかの相関性があると思われる。

国家形成(近世)期のラカン、すなわち楼閣本堂を伴う僧院の源流は城にあるという見方ができるのではないだろうか。11世紀以降のチベット仏教諸派林立時代に各地の山上に設けられたゾンは、17世紀の初代シャブドゥンによる天下統一により状況が一変していく。国家統一後、多くの弱小ゾンは廃城するか、僧院への機能転換を余儀なくされたのである[参考文献3・15]。今回調査した例としては、ティンブー市のワンディツェ寺とパロ地区のドゥブジ寺が元は城であった例であり、ヒアリングによれば、それぞれ今でもワンディツェ・ゾン、ドゥブジ・ゾンと呼ばれることがある。

山を切り刻む深い渓谷に境内地を囲まれたドゥブジ・ゾンは、まさに天然の要害であり、城として絶好の地勢にあった。インフォーマントのウタム・ガーレイ氏によれば、城の時代には楼閣ウチの四方を石積壁で囲んでいたが、廃城後は前側の壁を撤去し、楼閣の位置で壁を納め、僧院とした。たしかに、当初石積壁の痕跡は今も残っている。城の中の楼閣は天守閣のようなものであり、まさに城の中心施設であった。しかし、僧院となってからは、奥に平屋の本堂を新しく設け、門脇の楼閣は長屋門の長屋のような雑舎として扱われている。ドゥブジ寺の場合、遠くから眺めると、ランドマークとして圧倒的な印象を与える楼閣がじつは長屋であることに驚きを禁じえない。こうした雑舎としての楼閣ウチは例外的であり、繰り返しになるけれども、一般の僧院では本堂を2階建の楼閣式にして境内を堀で囲い込む。本尊を安置する内陣は通常本堂2階の中心部に配される。この場合、城の空間構成により近いと言えるであろう。このような空間構成は一般民家(農家)にも継承されている。Z家のような2～3階建の主屋を雑舎や堀で取り囲む平面構成は城の圧縮形式とみなすべきものであろう。すなわち、先行して発達した城の建築形式が近世の僧院や民家の基本モデルになったことを推定できる。

5-3 ネパール大地震の影響

2015年に発生したネパール大地震はブータンの歴史的建造物にも大きな影響を及ぼしている。2016年以降、地震によって損壊した本堂等の境内建物や山上の瞑想洞穴の再建が加速的に進行しつつある。そうした再建事業にあたって事前の調査がおこなわれることは稀である。日本や欧米諸国のような「修復」事業ではなく、ほぼ全ての古材を新材に差し替える「再建」事業となっている点、大変惜しまれるが、国外者が口を挟む余地はない。しかしながら、

再建される以前の建物の記録化にはなんとか貢献したいという思いが強くなっている。筆者らの調査記録が、プー

2017 : pp. 63-81

- 23) 大石忠正 (2017) 「ブータンの崖寺と瞑想洞穴 第4～5次調査の報告」平成28年度公立鳥取環境大学環境学部卒業論文

[参考サイト]

- 1) Uesu Gewog
https://en.wikipedia.org/wiki/Uesu_Gewog
- 2) ブータン館 Bhutan Khang
<http://bhutan.fan-site.net/19c.htm>
- 3) ブータン館 Bhutan Khang
<http://bhutan.fan-site.net/19e.htm>
- 4) タントン・ギャルボ考～チベットのダヴィンチは聖僧か、風狂僧か～
<http://mikiomiyamoto.bake-neko.net/tangtong.htm>
- 5) タグツウガン橋
<http://wikimapia.org/4167555/Tagchogang-Bridge>
- 6) The Buddhist Forum A Voice for Harmony
<http://thebuddhistforum.com/wp/wangditse-lhakhang.html>
- 7) The Buddhist Forum A Voice for Harmony
<http://thebuddhistforum.com/wp/wangditse-lhakhang.html>
- 8) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160911.html>

- 9) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160912.html>
 - 10) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160913.html>
 - 11) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160914.html>
 - 12) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160915.html>
 - 13) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160916.html>
 - 14) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160917.html>
 - 15) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160918.html>
 - 16) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160919.html>
 - 17) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160920.html>
 - 18) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160921.html>
 - 19) 男はつらいよ 八地区の進撃
<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-date-20160922.html>
- 以上の閲覧日はすべて2017年10月15日

(投稿日2018年 2月22日 受理日2018年 4月 9日)